往生の語義について

中埜文成

一

「往生」と云う語がシナ、日本の淨土教の諸家の用例に見る如き意味内容を以て、用いられるに至る迄には、幾つかの發展段階を經ている。この語は、淨土教に於ては、往生要集の如く、その標題となっている著述も少くない程、重要な役割を果す語となっているから、淨土思想の解明の爲には、佛教の發達過程を通じて、如何なる意味に用いられているかを明にすることが大切である。即ち、言葉の理解には、思想の裏付を必要とするから、その時代の具體的事實から出發しなければならない。併しながら、佛教の場合には、思想を表現するのに適切な形式を備えている語が多いことは、何人も認めるであろう。從ってその方面からの究明も可能である。この小論に於て用いる資料は、長阿含經卷第十の三聚經、大品般若經卷第二の往生品と無量壽經とにとどめる。

二

「往生」に相當する原語 upa-√pad は、パーリには upapajjati と uppajjati との二つの語形を有するが、梵語には upapadyate のみである。それは、入・生・趣・往生等と漢譯せられ、入地獄、生天上、趣惡趣、往生淨世界の如く用いられている。[1][2]

長阿含經卷第十の三聚經[3]は惡趣、善趣、涅槃に一法より十法を配して、法數を取扱っているが、その第八法のところで、八邪行は惡趣に向い、世の正見、正志、正語、正業、正命、正方便、正念、正定は善趣に向い、八賢聖道は涅槃に向う、と說いているが、これは、增一阿含經卷第十三の地主品に於て、三聚[4] tayo rasi を說いて、八正道を等聚、八邪道を邪聚となすのと全く同じ趣意をのべたものである。從って趣惡趣は邪聚、趣善趣は不定聚、趣涅槃は等聚に配せられることになる。これによってみれば、阿含經に於ては、upa-√pad は惡趣、善趣、涅槃のいづれに趣くことをも意味していたことが知られる。

大品般若經卷第二の往生品[5]では、菩薩の來生と往生とを明すところに於て、菩薩を(1)從他方佛國來生、(2)從兜率天上來生、(3)從人道中來生の三種に分ち、夫々、疾與般若波羅蜜相應、不失六波羅蜜、不能疾與般若波羅蜜相應と說いているが、これは菩薩を、六度と相應するか否かによって、三聚[6]に分類したものである。ここに菩薩の往生を說く理由として、龍樹は智度論の往生品を釋するところに於て、中論[7]の偈を引用し、更に畢竟空不遮生死業因緣是故說往生とのべ、二諦の妙用を發揮している。

無量壽經に於ける正定聚、不定聚、邪定聚は、親鸞はこれを難思議、難思、雙樹林下の三往生に配し、世親が五念門によるとなしたところを承けて、他力廻向の信[8]によることを明にした。

以上の用例によって「往生」は常に三聚と云う範疇によって說かれていることと、その手段となっているものの内容は八正道、六度、五念門等の如く、佛教の發達過程によって、異っていることが知られる。「往生」はこのような形式にて說かれているが、但、無量壽經によって代表せられている立場は、著しく質的に相違していること

とに注意せられねばならない。それは願行思想にほかならない。かくの如く、廣く三界・六道並に諸佛の淨土に生ずることに用いられていた語が、淨土教の盛になるに及んで、主として極樂淨土に生れることを意味するようになった。

1　大一　12b

2　華嚴經入法界品第三十四の十六

3　大一　59b

4　大二　614b

5　大八　225、梶芳光運氏「原始般若經の研究」679

6　華嚴經探玄記第十四（大三十五　307a）には、大乘菩薩の得失に約して、六度の行に障る六蔽は邪定相、六度の行は正定の相なる旨をのべている。

7　大二十五　338

一切諸法實　一切法虛妄
諸法實亦虛　非實亦非虛
涅槃際爲眞　世間際亦眞
涅槃世無別　小異不可得

8　大八十三　700b、大八十三　679b

新刊紹介　7

大野法道　「大乘戒經の研究」

前篇　戒學による大乘經の整理

第一章　經錄の大乘律選示　第二章　大藏經の大乘律編制　第三章　大乘戒經の採擇方法と所採部數　第四章　大乘戒經の分類整理　第五章　大乘戒經の敍目

後篇　大乘戒經各說

第一章　摩訶般若波羅蜜經の系統　第二章　遺日摩尼寶經の系統　第三章　維摩詰所說經の系統　第四章　妙法蓮華經の系統　第五章　大方廣佛華嚴經の系統　第六章　無量壽經の系統　第七章　菩薩地持經の系統　第八章　阿含經の系統　第九章　大般涅槃經の系統　第十章　諸系統を受くる梵網經、大乘本生心地觀經　第十一章　大方等大集經の系統　第十二章　大寶積經の系統　第十三章　密敎經の系統　第十四章　單獨經　第十五章　十善戒、五戒、八戒、十戒經　第十六章　懺悔經　第十七章　菩薩戒品受戒法　第十八章　不採擇經略見

（A5　四八〇頁　理想社）